

過墻龍文磁器—大阪出土の清朝青花と国産染付を中心に—

松本 百合子

要旨 18世紀以降の近世遺跡から出土する過墻龍文磁器は、中国産青花と国産染付の2種類が存在する。それらの出土地と文様・器形を紹介し、貿易陶磁としての青花磁器の受容と、「写し」製造について考察する。過墻龍文青花は製造後比較的早期に輸入され、間をおかず肥前で模倣品が製造された。手本は景德鎮窯系の青花であり、福建・広東窯系の製品は模倣されることはなかった。

1. はじめに

大坂城下町跡をはじめとする大阪市内の近世遺跡の発掘調査では、貿易陶磁である清朝陶磁が出土する。平成22年度に実施した北区中之島蔵屋敷跡（高松藩蔵屋敷跡）の調査でも多くの中国産青花磁器が出土した（大文研2012a）。そのなかでも過墻龍文を描いた青花磁器碗1は仙芝祝寿文などを描いた輸出用に大量生産された粗製碗とは一線を画する精品であった。北区茶屋町遺跡からも過墻龍文青花磁器碗・皿が複数出土し、共伴するかたちで過墻龍文肥前染付が見つまっている（大文研2012b）。

龍文は中国古来、さまざまな器物に用いられた吉祥文様である。実在しない聖獣は絶対的権力を持つ皇帝に重ねられ、五指龍=皇帝として表現されてきた。龍文のひとつ、過墻龍文とは清朝の景德鎮民窯を中心とした青花磁器に流行した意匠である。龍の上半身を器の内面に描き、下半身を口縁から折り返すように外面に描き、あたかも龍が壁を乗り越えるかのような姿から過壁龍文と呼ばれている。龍は雲間を疾走し、前足で宝珠をつかみ、周囲には火炎や四方に光を放つ円相などが配される。口縁を境に器の内外面で文様が連続する「過墻文」の源流は、15世紀後半、花卉をモチーフとした明朝成化期の「過枝文」とされ（馬平2008）、過墻龍文は18世紀前半の雍正期ごろに流行し清朝末期にかけて採用された。

本稿は大阪および他地域から出土した過墻龍文磁器について現状での集成を行い、受容の様子を考察したい。

2. 大阪で出土した過墻龍文磁器

1980年代から本格的に始まった大坂城下町跡の発掘調査では、17世紀以降の遺構から清朝陶磁が多数見つまっている。現在まで過墻龍文磁器が出土しているのは高松藩蔵屋敷跡と茶屋町遺跡の2か所である。

(1) 高松藩蔵屋敷跡（図1-1）

大阪市北区中之島5丁目に所在する高松藩の大坂蔵屋敷跡である。元禄元年（1688）の絵図にはすでに「松平讃岐」の文字が見え、17世紀後葉には高松藩の屋敷地であったことがわかる。堂島川に開

口する船入を備え、平成22年度の調査では18世紀前葉の礎石建ちの土蔵や井戸・土壙、18世紀末～19世紀初頭の庭園遺構や井戸・土壙が見つかった。過墻龍文青花磁器碗1は18世紀末～19世紀初頭の水溜め遺構SK504から出土した。SK504は幅2.7m、長さ3m以上、深さ1.2mの木枠を用いた方形の土壙で、中国産磁器のほか肥前磁器・陶器、瀬戸美濃焼陶器、関西系陶器、丹波焼、備前焼、弓野焼、軟質施釉陶器、土師質土器などが廃棄されていた。

青花碗1：直径約10cmの青花碗である。龍文は4指で、内面に上半身を、外面に下半身を描き、小さな目と、髭・歯・二股の角・耳・鬣・尾を明瞭に描く。鱗は1枚ずつ表現される。右脚前方に宝珠を、頭の前に四方に光を放つ円相を描き、周囲には火炎と二重輪郭線で囲まれた雲を配置する。高台は端部の釉をふき取り、内部はカンナ削り、円圏と二重方形で囲まれた線描きの記号文銘を描く。方形記号文銘は雍正期青花の特徴であることから、景德鎮窯で18世紀前葉に製作されたものと考えられる。大きく二つに割れたのち焼継で補修されている。

(2) 茶屋町遺跡 (図1-2～12)

大阪市北区茶屋町に所在し、江戸中期以降に大坂城下町の郊外歓楽地として形成された茶屋街関連の遺跡である。平成22年度の調査では、18世紀後半～幕末にかけて形成された廃棄土壙から清朝磁器を始めとした多様な生活道具が見つかった。過墻龍文磁器は青花2～4・10・11と肥前または京焼の染付5～9・12が19世紀第1四半期の大型廃棄土壙SK217～219から出土した。

青花碗2：龍文は4指、小さな目と髭・歯・二股の角・耳・鬣などを明瞭に描く。鱗は1枚ずつ描かれ、龍の周囲には二重線で囲まれた雲と、頭の前に四方に光を放つ円相の変形体を描く。高台は端部の釉をふき取り、円圏の中に二重方形で囲まれた不明文字を描く。焼継する。

青花碗3：龍文は4指、小さな目と髭・歯・二股の角・耳・鬣などを明瞭に描く。鱗は1枚ずつ描かれ、龍の周囲には二重線で囲まれた雲を配置する。高台端部の釉をふき取り、円圏の中に二重方形で囲まれた「福」を描く。焼継する。

青花碗4：龍文は4指、小さな目と髭・歯・二股の角・耳・鬣などを明瞭に描く。鱗は1枚ずつ描かれ、龍の周囲には二重線で囲まれた大きな雲を配置する。高台端部の釉をふき取り、円圏の中に筆錠如意文を描く。焼継する。

肥前染付碗5・6：端反り碗で、龍文は4指、大きな頭部に大きな丸い瞳の目、髭・歯・鬣を描く。角・耳は不明瞭で、鱗は1枚ずつ描かれるが雑である。龍文の周囲には火炎と二重線で囲まれた雲を配置する。高台は広く、銘はない。焼継する。

肥前染付碗7：龍文は3指、大きな頭部に大きな丸い瞳の目、歯・鬣・尾を描き、角は不明瞭である。鱗は1枚ずつ描かれる。龍文の周囲には退化した火炎と、二重線で囲まれた小な雲を配置する。呉須は薄く、現状で焼継の痕跡は見られない。

肥前染付碗8：龍文は3指、上半身は内面に偏って配置される。大きな頭部に大きな丸い瞳の目、歯・鬣を描き、角はなく耳は不明瞭で鱗は直線で格子状に表現される。龍文の周囲には火炎と二重線で囲まれた小な雲を配置する。高台内には二重方形内に「福」銘を書く。焼継する。

肥前染付碗9：高台が高く、底面がやや平らな碗である。龍文は大きな頭部に大きな瞳の目、髭・歯・

二股の角・耳・鬣などを明瞭に描き、鱗は1枚ずつ描かれる。龍文の周囲には二重線で囲まれた雲を描く。高台は外面に波状の渦巻き文を描き、円圈の中に二重方形で囲まれた不明文字を描く。京焼の可能性はある。

青花皿10・11：青花碗に比べ、器壁が厚い皿である。龍文は小さな目と、歯・二股の角・耳・鬣・尾などを明瞭に描く。鱗は1枚ずつ表現され、指は4本で蹴爪も表現される。龍の周囲には二重線で囲まれた雲を配置する。高台は端部の釉をふき取り、二重円圈内に筆錠如意文を描く。焼継する。

肥前染付皿12：口縁付近に稜をもち、外側に開く皿である。龍文は4指で、細長い頭部に飛び出した目、鬣・歯・角・鬣を描く。耳は不明瞭で、鱗は直線で菱形に描かれる。龍文の周囲には雲を配置する。高台内には円圈の中に虫文銘を描く。

4. 他地域から出土した過牆龍文磁器

(1) 長崎

1) 岩原目付屋敷跡 (図2-13)

長崎奉行の監視と補佐として置かれた長崎目付の屋敷跡である(長崎県教育委員会2005)。18世紀初頭以降の土壌SX1から肥前染付碗13が出土している。龍文は3指、前足で宝珠をつかみ、大きな頭部に大きな丸い瞳の目、歯・角・鬣等を描き、鱗は直線で表現される。龍の周囲には火炎と二重線で囲まれた小な雲を配置する。高台内に虫文銘を描く。

2) 唐人屋敷跡 (図2-14~18)

幕府が長崎に来航した中国人を集住させた施設で、彼らの日用品としての中国陶磁が出土している(長崎市教育委員会2001)。18世紀中葉に廃棄された1号堀から青花碗3点・皿2点が見ついている。14・15は青花碗で、14は二重円圈の中に筆錠如意文を描き、15は円圈のみ残る。龍文は4指で、小さな目と鬣・歯・角・耳・鬣などを描く。龍文の周囲には二重線で囲まれた雲を配置する。16は青花大碗である。高台は太く高く、内部に角福銘を描く。龍文は4指、前足前方に宝珠を配する。大きな頭部に大きく飛び出した目、歯・角・鬣等を描く。龍の周囲には火炎と二重線で囲まれた雲を配置するが、雲は龍の胴体と一体化し図像全体は崩潰している。器形、呉須の発色、図像の崩潰具合から、福建・広東を中心とする中国南方窯の製品と考えられる。17・18は青花皿で、内・外面に崩れた龍文と雲を描く。器形や図像の崩潰具合から、福建・広東を中心とする中国南方窯の製品と考えられる。

3) 万才町遺跡 (図2-19~23)

長崎市中の内町に所在する町年寄高島家の屋敷跡である。16世紀~19世紀の中国製品を中心とした貿易陶磁が多数出土している。19は肥前染付碗で、18世紀中葉~19世紀初頭の土壌SK154から出土した(長崎県教育委員会1995)。龍文は4指、大きな頭部に大きな丸い瞳の目、歯・鬣を描き、鱗は細かく描かれる。前脚は宝珠をつかみ、龍文の周囲には火炎と二重線で囲まれた雲を配置する。高台内には方形文が残る。20は18世紀後半の土壌SK22から見つかった青花蓋碗(註1)の身である。口縁は蓋を受けるために受け口状になる。龍文は4指、小さな目と、鬣・歯・角・耳・鬣などを明瞭に描く。鱗は1枚ずつ表現される。頭の前に四方に光を放つ円相を配し、二重線で囲まれた雲を少なめに

描く。高台内には二重円圏に筆錠如意文を描く。**21**は**20**とセットになると考えられる青花蓋である。龍文は4指で、蓋の外面上半身と宝珠・雲を描き、内面には下半身と雲を描く。つまみの内部に筆錠如意文を描く。**22**は青花大碗で、太く高い高台をもつ。高台内には「生春」銘を書く。龍文は4指で、大きな頭部に大きく飛び出した目、角・鬣等を描く。龍の周囲には雲を配置するが、雲は龍の胴体と一体化し図像全体は崩潰している。器形や図像の崩潰具合から、福建・広東を中心とする中国南方窯の製品と考えられる。**23**は18世紀末～19世紀のSK8から出土したやや端反りの肥前染付皿である。蛇の目高台で款銘はない。龍文は4指で、大きな頭部に大きく飛び出した目、角・耳・鬣などを描く。龍の周囲には二重線で囲まれた雲を配置する（長崎県教育委員会2007）。

4) 出島和蘭商館跡 カピタン別荘跡 (図3-24)

出島に設置されたオランダ商館長の住居兼商館事務所からは、ヨーロッパ産陶磁をはじめ、中国・東アジア・イスラム圏の陶磁器が見つかった（長崎市教育委員会2002）。**24**は18世紀後半とされる道路の玉石下から見つかった肥前染付の広東碗形小碗で、龍文は3指、大きな頭部に大きな丸い瞳の目を描き、角・耳は不明瞭である。高台内の銘款は方形内に不明文字である。

5) 桜町遺跡 (図3-25・26)

長崎市中の内町に所在する森四郎衛門の屋敷跡とみられる遺跡である（長崎市教育委員会2015）。**25**は青花碗で18世紀後半の土壙SK8から出土した。龍文は4指である。高台内に二重方形銘が残る。**26**は18世紀後半の第1面中から見つかった青花碗である。龍文は4指で、小さな目、角・鬣・尾を描き、前脚の前方に宝珠を配し、火炎と二重線で囲まれた雲を描く。二重方形内に記号文の款銘をもつ。

6) 興善町遺跡 (図3-27)

長崎市中の内町に所在する、長崎貿易における有数の商家であった徳見家の屋敷跡である（長崎市教育委員会2012）。肥前染付皿**27**は18世紀後半～19世紀初頭の井戸SE24から出土した。龍文は大きな頭部に大きな丸い瞳の目、歯・鬣を描き、角は不明瞭で鱗は粗く1枚ずつ描かれる。龍の周囲に火炎と小な雲を配置する。高台は蛇の目高台である。

7) シーボルト宅跡 (図3-28)

長崎市鳴滝2丁目に所在する、シーボルトの診療所兼私塾跡である（長崎市教育委員会2004）。18世紀以降の地層から青花碗**28**が出土している。龍文は4指で、前足で宝珠をつかみ、鱗は直線的に描かれる。龍文の周囲に火炎と雲を描く。

8) 出島和蘭商館跡 出島南側石垣 (図3-29)

出島の南側の護岸石垣の表土および攪乱土から青花皿**29**が出土している（長崎市教育委員会2010）。龍文は4指で、鱗は1枚ずつ描かれる。

9) 出島和蘭商館 三番蔵跡 (図3-30)

19世紀～現代の地層から青花大碗**30**が出土している（長崎市教育委員会2008）。龍文は3指で、雲は龍の胴体と一体化している。高台は高く太く、「美玉」銘を持つ。器形、呉須の発色、図像の崩潰具合から、福建・広東を中心とする中国南方窯の製品と考えられる。

10) 東中町日行使松尾家宅跡 (図3-31)

長崎市中東中町の日行使を勤めた松尾家跡から青花大碗**31**の小片が出土している。龍文は4指で、景德鎮窯の製品で18世紀中葉～末のものとしてされている（大橋康二1991）。

（2）その他

1）広坂遺跡（図3-32～35）

石川県金沢市広坂に所在する金沢藩の武家屋敷跡である。19世紀第1四半期～第3四半期前半の土壙SX1035から青花小碗**32**、肥前染付碗**33**が出土している（庄田知充2016）。**32**の龍文は4指で、前脚の前方に宝珠を配置する。**33**の龍文は3指、大きな頭部に大きな丸い瞳の目、歯・鬣を描き、角は不明瞭である。龍の周囲に火炎と二重線で囲まれた小な雲を配置する。高台内に虫文を描く。

2）金沢城址 尾坂門（図3-34）

加賀藩金沢城の正門である尾坂門の調査で、18世紀後半～19世紀前半の石組暗渠1の掘方から肥前染付碗**34**が出土している（石川県金沢城調査研究所2016）。

3）富永コレクション（図3-35）

35は青花皿である。龍文は4指、雲は龍の胴体と一体化している。「玩玉」銘を持つ。18世紀に生産された福建系の製品と比定されている（佐賀県立九州陶磁文化館2016）。

4）高野山

金剛峯寺周辺の遺跡より肥前染付碗が出土している（註2）。

5. まとめ

（1）文様と器種の特徴

以上の例から、過墻龍文青花は景德鎮窯系と福建・広東系窯系に分けられる（表1）。すなわち、景德鎮窯系は器壁が薄く高台のつくりも丁寧で、龍文は顔面・胴体・四脚ともに丁寧に描かれる。1・2・20には四方に光を放つ円相が描かれており、過墻龍文のなかでも古い様相を示すと考えられる。福建・広東窯系の製品は長崎で一定量出土しているが、龍文と雲文が同化するなど文様が退化・崩潰し、器壁が厚く高台も大きく厚い粗製品といえる。そのうち16～18・29は徳化窯の可能性はある（註3）。

肥前染付の過墻龍文は、大きな頭部と丸い瞳、直線で描かれた鱗や硬直した下半身など描写は稚拙であるが、器形や文様構成は景德鎮窯の製品を模倣しており、福建・広東窯系を写したものはない。福建・広東窯系の製品は輸入窓口である長崎で中国人の日用品として使われたが、日本国内市場では高級舶来品としては認知されず、肥前染付でコピー商品が作られることはなかったようである。

器種は中国に残る資料が直径28cm前後の大皿が多いのに対し（註4）、日本出土のものはほとんど直径10cm前後の碗や11cm前後の皿である。日本では18世紀以降に煎茶道が流行し、喫茶用の銘碗として中国製の青花小碗が珍重されたのに対し、中国では喫茶に限らず料理の盛り皿としての需要が高かったためであろう。

（2）流通の時期と分布

近世遺跡における過墻龍文青花磁器の初出は18世紀中葉の長崎唐人屋敷跡の5点である。肥前染付

磁器は岩原目付屋敷跡の13が18世紀初頭に遡る可能性があるが、ほぼ同時期とみてよいだろう。大阪では今のところ長崎よりやや遅れて高松藩蔵屋敷跡の18世紀末～19世紀初頭の1が初出である。過牆龍文は雍正期（1722～1735）に景德鎮民窯で流行した文様であることから、中国での流行から間をおかず長崎にもたらされ、ほぼ同時に肥前で写しが製造されたことがわかる。

出土地は青花・国産染付とも長崎・大阪・金沢に限られ、江戸では未発見である。青花と染付が共存する例は長崎では商家の屋敷跡、大坂では茶屋街、金沢では武家屋敷などで、使用者は接待や行事などの宴席で多量の高級磁器を必要とする階層であった。それに対し、中国人の居住地である唐人屋敷跡では青花のみ出土している。

おわりに

過牆龍文の碗や皿は輸入とほぼ同時に肥前染付で写しが作られた。龍文が内面から外面にかけて繋がる意匠は斬新で、さぞ目を引いたことであろう。茶屋町遺跡で同規格の青花皿10・11が存在することは、輸入段階で同規格の製品が複数存在し、大坂の消費者がセットで購入する人気商品だったことがわかる。肥前染付の購入が青花磁器の購入と同時なのか後なのかは分からないが、後だとすると青花磁器が破損したのち見本の碗や皿を肥前に送り、補完のために複製させた可能性もある。また、大阪で見つかった12点のうち9点に焼継がみられ、補修率の高さも注目される。青花・染付を問わず過牆龍文の磁器は破損しても簡単には捨てられず、補修されて数客揃えで大切に扱われたのである。

清朝磁器は肥前磁器に影響を与えたものが少なくない。本稿では過牆龍文を取り上げその受容について考察したが、他の文様についても検討することで流通の過程や地域による受容の差が見えてくるであろう。

註)

- 1) 20は報告書（長崎県教育委員会2007）では肥前染付と報告されているが、龍文の表現や円相の存在から本稿では青花とした。21についても20と龍文が酷似することから青花とした。
- 2) 高野山霊宝館学芸員鳥羽正剛氏のご教示による。
- 3) 福建・広東系では、福建徳化窯や香港大埔碗窑で過牆龍文青花が出土・採集されている。徳化窯の採集品には16～18・29と酷似するものが多く、これらの生産地の可能性が高い。
- 4) 中国での過牆龍文青花の報告は少ない。WEBで公開されているものを見る限り、北京首都博物館の青花過牆龍文盤（清朝）、広東省高州市博物館の青花過牆龍文盤（雍正）、広東省清遠博物館の青花過牆龍文盤（雍正）、広東省博物館の青花過牆龍文碗（嘉慶～道光年間）、広東省客家文物博物館の青花過牆龍文碗（清中期）、福建省明溪県博物館の徳化窯青花過牆龍文盤（雍正）、河南省鄭州城外陶磁芸術博物館の青花過牆雲龍文盤（清朝）など、盤（大皿）が多い。

参考文献

- 石川県金沢城調査研究所2016、『金沢城跡－鶴ノ丸第1次・新丸第1次・尾坂門・二ノ丸園路・数寄屋屋敷－』。⑮
大阪文化財研究所2012a、『中之島蔵屋敷跡発掘調査報告書』。①
2012b、『茶屋町遺跡発掘調査報告書』。②

- 大橋康二ほか1991、「東中町日行使松尾家宅跡出土品について」『長崎市立博物館官報 第31号』. ⑬
- 佐賀県立九州陶磁文化館2016、『日本磁器の源流』. ⑯
- 庄田知充2016、「金沢城下出土の近世貿易陶磁」『歴史資料としての近世貿易陶磁』関西近世考古学研究24、関西近世考古学研究会. ⑭
- 長崎県教育委員会1995、『万才町遺跡』長崎県文化財調査報告書第123集. ⑤
- 2005、『長崎奉行所（立山役所）跡 岩原目付屋敷跡 炉粕町遺跡』長崎県文化財調査報告書第183集. ③
- 2007、『万才町遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第192集. ⑥
- 長崎市教育委員会2001、『唐人屋敷跡—十善寺コミュニティ住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』. ④
- 2002、『出島和蘭商館跡—道路及びカピタン別荘発掘調査報告書—』. ⑦
- 2004、『シーボルト宅跡調査報告書』. ⑩
- 2008、『出島和蘭商館跡—カピタン部屋跡他西側建造物群発掘調査報告書—』. ⑫
- 2010、『出島和蘭商館跡—南側護岸石垣発掘調査・修理復元工事報告書—第1分冊 南側護岸石垣発掘調査報告書』. ⑪
- 2012、『興善町遺跡—長崎県市町村職員共済組合事務所建設計画に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』. ⑨
- 2015、『桜町遺跡—長崎市桜町5番25における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』. ⑧
- 郭学雷2013、「香港大埔碗窑再認識」『海上瓷路国際学術検討会論文集』広東省博物館編
- 陳建中1999、『德化民窯青花』文物出版社
- 馬平2008、『元明清古瓷標本図翻』経済日報出版社 p.232
- 梁劍銘2013、『清代民窯青花瓷画』蘇州大学出版社

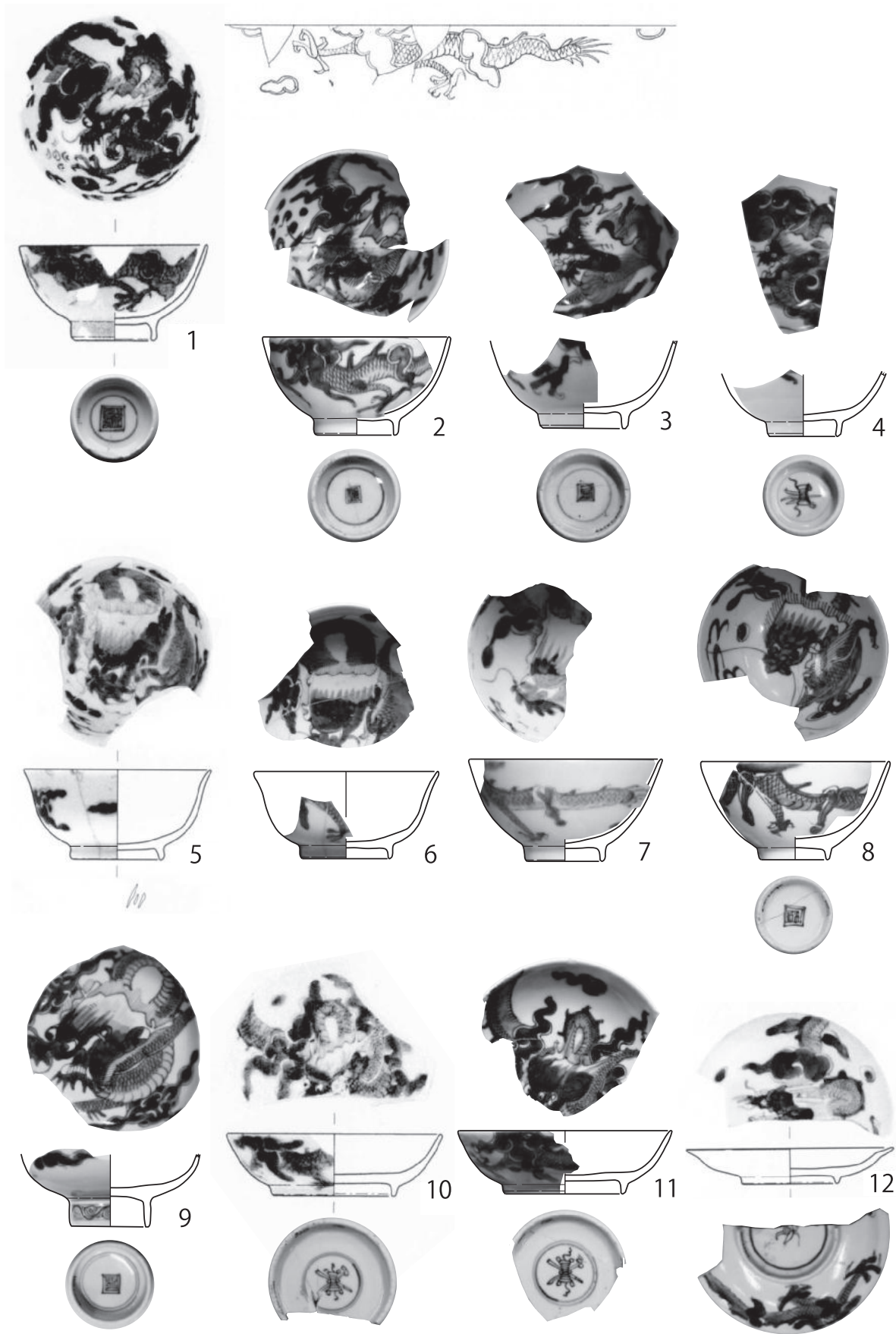


図1. 過牆龍文磁器 (S=1:3)
 1:高松藩蔵屋敷、2~12:茶屋町遺跡



図2. 過牆龍文磁器 (S=1:3)
 13: 岩原目付屋敷跡、14~18: 唐人屋敷跡、19~23: 万才町遺跡

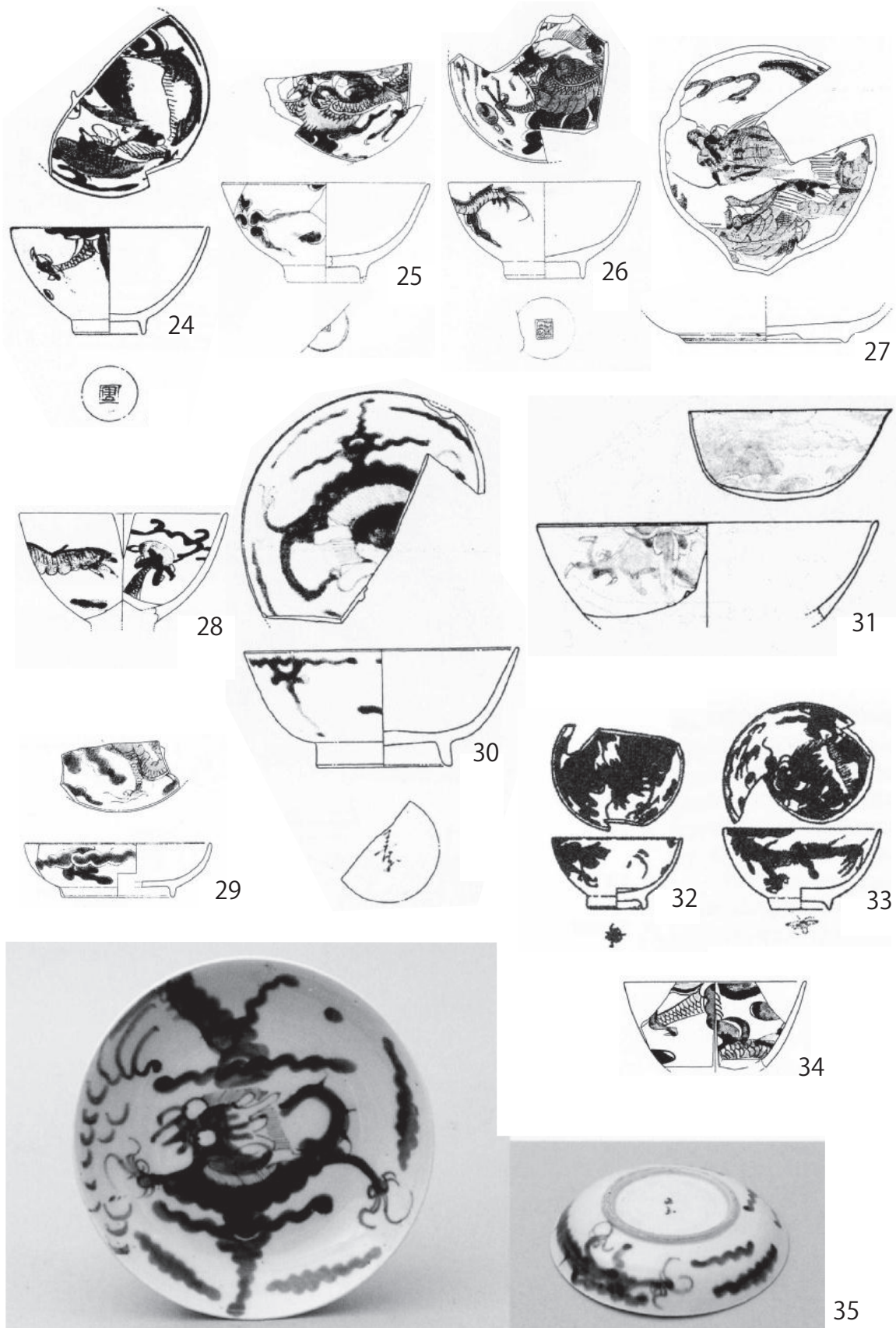


図3. 過牆龍文磁器 (S=1:3)

24:出島和蘭商館跡 カピタン別荘跡、25・26:桜町遺跡、27:興善町遺跡、28:シーボルト宅跡、29:出島和蘭商館跡 出島南側石垣
30:出島和蘭商館跡 三番蔵跡、31:東中町日行使松尾家宅跡、32・33:広阪遺跡、34:金沢城址 尾坂門、35:富永コレクション

遺跡名	番号	うつわ											遺構		文献 報告 番号		
		産地	器種	口	底	高	踵	角	鱗	指	飛翔物	高台銘	特徴	遺構名		年代	
高松藩蔵屋敷跡 NX10-1	1	景德鎮 青花	碗	9.7	4.2	5.0	点	二股	鱗	4	宝珠 円相	二重方形内に記号 文	焼継	SK504	18世紀末~19世紀初頭	①	52
茶屋町遺跡 CH10-2	2	景德鎮 青花	碗	9.8	3.9	5.2	点	二股	鱗	4	円相	二重方形内に不明 文字	焼継	SK217~219	徳川2期 19世紀第1四半期	②	506
	3	景德鎮 青花	碗	—	4.2	(4.6)	点	二股	鱗	4	—	二重方形内に「福」	焼継				505
	4	景德鎮 青花	碗	—	3.6	(3.4)	点	二股	鱗	—	—	筆錠如意文	焼継				504
	5	肥前 染付	端反り碗	9.8	4.6	4.7	丸	不明瞭	鱗	4	—	なし	焼継				128
	6	肥前 染付	端反り碗	9.8	4.6	4.6	丸	不明瞭	鱗	4	—	なし	焼継				509
	7	肥前 染付	碗	10.2	3.9	5.4	丸	不明瞭	鱗	3	—	なし					508
	8	肥前 染付	碗	9.8	3.5	5.2	丸	不明瞭	直線	3	—	二重方形内に「福」	焼継				507
	9	京焼? 染付	碗	—	4.0	(3.8)	丸	二股	鱗	—	—	二重方形内に不明 文字					510
	10	景德鎮 青花	皿	11.3	6.3	3.3	点	二股	鱗	4	—	筆錠如意文	焼継				115
	11	景德鎮 青花	皿	11.2	6.2	3.3	点	二股	鱗	4	—	筆錠如意文	焼継				503
	12	肥前 染付	折れ皿	10.8	4.9	1.9	点	直線	直線	4	—	虫文					190
	岩原目付屋敷跡	13	肥前 染付	碗	10.0	4.0	5.4	丸	不明瞭	直線	3	宝珠	虫文				SX1 地山掘込み土壌
唐人屋敷跡	14	景德鎮 青花	碗	9.5	3.8	4.9	点	二股	鱗	4?	—	筆錠如意文		1号堀、3層	1735以降 18世紀中葉廃棄	④	23
	15	景德鎮 青花	碗	9.7	3.6	5.0	—	二股	鱗	4	—	—		1号堀、3層			24
	16	福建・広東 青花	大碗	16.6	8.1	7.5	点	二股		4	宝珠	方形内に「福」	胴・雲同化 文様崩潰	1号堀、3層			39
	17	福建・広東 青花	皿	15.3	8.3	3.2	—	—	—	—	—	—	胴・雲同化 文様崩潰	1号堀、3層			57
	18	福建・広東 青花	皿	9.7	5.4	2.9	丸	不明瞭	—	—	なし	胴・雲同化 文様崩潰	1号堀、3層	48			
万才町遺跡	19	肥前 染付	碗	10.0	4.0	5.8	丸	—	直線	4	宝珠	方形		SK154	IV-2期~V-1期	⑤	3
	20	景德鎮 青花	蓋碗の身	11.4	5.4	6.0	点	不明瞭	鱗	4	円相	筆錠如意文	報告では肥 前染付	SK22	18世紀後半	⑥	97
	21	景德鎮 青花	蓋碗の蓋	10.4	4.4	3.1	点	不明瞭	鱗	4	宝珠	筆錠如意文	報告では肥 前染付	H	235		
	22	福建・広東 青花	大碗	14.6	6.6	6.5	丸	直線		4		「生春」	胴・雲同化 文様崩潰	ⅢC-2	200		
	23	肥前 染付	皿	12.3	8.0	2.6	丸	不明瞭	直線	4	—	なし	蛇目高台	SK8	18世紀末~19世紀		158
出島和蘭商館跡 カピタン別荘跡	24	肥前 染付	小広東碗	10.4	5.6	3.5	丸	不明瞭	直線	3	—	方形内に不明文字		道路 ④区 玉石下	18世紀後半		⑦
桜町遺跡 森四郎衛門宅地	25	景德鎮 青花	碗	10.6	—	(5.0)	—	—	鱗	4	—	二重方形		第2面、SK2南 半	18世紀後半	⑧	36
	26	景德鎮 青花	碗	10.0	4.0	5.0	点	直線	鱗	4	宝珠	二重方形内に記号 文		第1面中	18世紀後半		47
興善町遺跡 長崎宿老徳見家 長州御用達吉村家 長州藩蔵屋敷	27	肥前 染付	皿	—	8.4	(1.5)	丸	不明瞭	鱗	—	—	なし	蛇目高台	SE24	18世紀後半~19世紀 初頭	⑨	218
シーボルト宅跡	28	景德鎮 青花	碗	(10.8)	—	—	—	—	直線	4	宝珠	—		D5、C5	18世紀~現代	⑩	6
出島和蘭商館跡 出島南側石垣	29	福建・広東 青花	皿	10.0	6.0	3.0	—	—	鱗	4	—	—		MIZ表土・攪乱		⑪	18
出島和蘭商館跡 三番蔵跡	30	福建・広東 青花	大碗	14.4	6.2	6.8	—	不明瞭		3	—	「美玉」	胴・雲同化 文様崩潰	1層	18世紀後半	⑫	7
東中町日行使 松尾家宅跡	31	景德鎮 青花	碗	17.8	—	(5.3)	—	—		4	—	—			生産：18世紀中葉~ 末	⑬	1
広坂遺跡 金沢城武家屋敷	32	景德鎮 青花	小碗	6.8	2.9	3.7				4	宝珠	花文?		SX1035土壌	IV-2期 19世紀第1四半期~ 第3四半期前半	⑭	33
	33	肥前 染付	碗	8.2	3.0	4.3	丸	不明瞭	直線	3		虫文					4
金沢城址 尾坂門	34	肥前 染付	碗	—	—	(4.5)	—	—	鱗	3?	—	—		石組暗渠1堀方	18世紀後半~19世紀 前半	⑮	84
富永コレクション	35	福建 青花	皿	19.1	3.8	10.3	点	不明瞭		4	—	「正玉」	胴・雲同化 文様崩潰		生産：18世紀	⑯	536
高野山		肥前 染付	碗					不明瞭	鱗	3?	宝珠	角銘					

表1 近世遺跡から見つかった過牆龍文磁器

